



釜石の未来を語り合った希望学シンポジウム

# 未来の釜石 希望探る

東大社会科学研究所 プロジェクト 課題や可能性報告

法学や政治学、経済学などさまざまな分野から、希望と社会との関係について考える東大社会科学研究所「希望学プロジェクト」のシンポジウムが三日、釜石市民文化会館で開かれた。

同研究所は、玄田有史助教授をリーダーに二〇〇五年度から希望学プロ

ジェクトに取り組んでいる。新日鉄の合理化で産業界構造の転換を迫られていた釜石を調査地に選

び、研究者約三十人が昨年七月と九月、市民への聞き取りやアンケートを行った。

石は中核企業への依存と反発がある」と指摘。地域内外の企業間や市民相互のネットワークの弱さを挙げ、①ネットワーク形成に必要なもの②希望の共有に必要なもの③歴史の再認識の三点から、さらに研究を深める必要があると述べた。

シンポジウムは中間報告として企画され、担当の中村尚史助教授が「釜

研究者四人による報告では、製造業や産業創出、グリーン・ツーリズム、経済活性化についての分析があり、「将来に生かせる素材があり、希望がないわけではない」という発言が目立った。

地域の代表として中間報告への感想を述べた市内の会社役員遊佐俊一さんは「ネットワークをつくるには、しっかりとストーリーが必要と実感した」と話した。